

慰安婦・強制連行・出版相次ぐ

93.9.14 (木)

従軍慰安婦や強制連行といった日本の戦争責任問題を取り扱う新刊本が続々出版されている。戦後補償を求める裁判が次々と起こされたり、政府の懸案になって世の中の関心が高まってきたことに出版社側が目をつけた。中学、高校生などにも読めるようソフトな内容にした。これまでもあまり知られていなかったインドネシアの補償問題も取り上げたりと内容も多彩になっている。一方で、幅広い読者層をつかむには苦心もあるようだ。

戦争責任 改めて問う

最も種類が豊富なのは従軍慰安婦問題についてのもの。最初

の訴訟が起きた九一年十二月以降、元慰安婦や兵士から聞いた証言などをとにした本が数多く刊行された。

中学、高校生向けに内容をやさしくした本も登場。岩波書店が「従軍慰安婦」にされた少女たち、明石書店が「従軍慰安婦のはなし」を発行した。事

埋もれた真実に光

実とフィクションを交えて物語風に仕立てたり、わかりにくい言葉に注釈をつけたりと親しみやすいように工夫した。

岩波書店では「この深刻な問題の若い人たちにわかってほしい」と話している。八月には旧日本軍が占領下の香港で香港ドルと強制的に交換



従軍慰安婦問題など日本の戦争責任に関する新刊本がスラリ（神保町の三省堂書店で）

中高生にも 読みやすく

させた軍票の補償を求めた訴訟が起きたが、当時の香港の様子を描いた本では「日本鬼（ヤンブンクワイ）」（現代書館）、「日本軍は香港で何をしたか」

ら残虐行為、略奪などを書きつづった。

との考えだ。

一方、「インドネシア兵補償問題」というなじみの薄い問題で、梨の木舎が夏に「インドネシア兵補の訴え」という本を発行した。「兵補」は占領下のインドネシアで旧日本軍属となった現地人。戦闘に参加し犠牲者も出たが、天引きされた貯金や恩給が支払われていないとして補償を求めている。本では当時の様子や元兵補が語り、あまりこの問題を知らない読者のため巻末では当時の写真・発行物、年表の掲載に多くのページを割いた。

梨の木舎では「従軍慰安婦など」と違っていてわかりにくく、まだ浸透していない問題だが、読者の目に触れれば関心が高まる、

（社会評論社）、「香港軍票と戦後補償」（明石書店）が相次いで今夏に発売。軍票問題だけでなく現地の人が体験したとい

た。それでも「市民運動も広範になり、新政権も何とかしなければと言わざるを得ない状態。現れないものもあるが、出すべきものは出していく」（明石書店）など、各社とも「精進」出版には意欲を見せている。